

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

5月3日に開催された第37回塩の道まつり小谷コースに、小谷の大自然と里山や史跡を新たな視線で発見しようと家族で初めて参加した。梅池高原に用意

された駐車場に車を止め、無料のバスで出発地点の下里瀬に。既に受け付けは、大勢の参加者で大混雑。下里瀬基幹センター前のテントに用意されたテーブルに、基幹センターから次々と振る舞い料理が出され、参加者の笑顔が広がる。舞台には、小谷太鼓保存会の子どもたちが太鼓の演奏、小中学生の有志が週1回の練習での太鼓演奏は、心に届く響きだ。カナダ出身の太鼓演奏者として活躍していると紹介されたスコットさんが小谷に伝達した「秩父屋台はやし」を地元の皆さんと

披露。体力と演奏技術を要する曲だ。過疎の地域に暮らしていても、力強く楽しく暮らしている、このメッセージが伝わってくるようだ。まつり全体に共通して感じた事だが、おま

地域に住む全員が、当たり前のように参加するイベントが、地域にとって大切だと考えてみませんか

つりをやめられていたと感じた場面には出会わなかった。小谷に住む、全員が楽しむまつりとして定着している心温まる情景が、実に感動的だった。特に強く印象に残ったのが、小中学生だ。太鼓の打ち手、飛脚、民謡の踊り手、歩荷、難所の親坂のポイントでの飲み物の提供、牛方宿前のテント内での甘酒等の振る舞いなど休む暇などない大活躍。聞くところ、中学生は学年ごとに役割が分担されている

しい山菜は、2000以上の高地の物が1番、朝暗いうちから山に行ったよ」との案内は、親戚をもてなす心意気だ。コースは、古道そのままの雰囲気。その場所、その場所ので地域の皆さんが長

便きそのものが、昔の道そのものだと言っているように伝わってくる楽しさを感じてしまふから不思議だ。約9時のコース、毎日の運動不足を感じるに十分ハードな内容

だったが、そのコースに挑む多くの高齢参加者のエネルギーが素晴らしい姿に圧倒された楽しい1日でもあった。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



コゴミ・イラ草・自家製加工漬物・オカキなど地域の食文化が味わえる多くの振る舞いは参加者の楽しみだ